

1973 年度学会賞受賞作品・授賞理由

◆石川賞「杜の都, 仙台のすがたーその将来像を提案する」

吉阪 隆正(早稲田大学理工学部教授)

〈選考理由〉

この報告書は, 地元仙台の官学民の委員で組織された仙台デベロッパ―委員会
で検討され, 昭和 60 年を目標とする仙台都市圏の都市構造, 交通体系, 土地利用等
の開発の基本方向を前提におき, 仙台都市圏の具体的な将来像, さらに各地区の市
民の生活像を尊重した地区開発構想を, ビジュアルな表現でデザインをしたものであ
る。

その特色は, 都市の総合計画が市民に充分理解され, コミュニケーションが図られ,
それによって市民の都市像に対するコンセンサスが得られるよう, 一つには計画の具
体的内容を市民生活に結びつけることにより, 地区毎の計画に関する主体性の確立
を図ったことである。これまでの都市の総合計画の多くは, 行政側の立場から公文書
的な文章や専門的な図表で示され, また全体計画のみを示すものであり, 市民にとっ
てはなじみ難く, また理解し難く, さらに生活像の把握がしにくいものであった。この仙
台の将来像の提案においては, 各地区の現在の性格を活かしながら, 市民の将来の
生活像に対応した計画の積み重ねを図りつつ, 全体計画の方向を示す計画プロセス
をとり, また都市形態としても杜の都の性格を強調し, 都市内に緑の環を入れ, この
緑の環に囲まれた地区毎に小都市のよさをもった性格を与えると同時に, それらの集
合体として仙台大都市圏を構成するユニークな手法をとっている。

またもう一つの特色は, 計画の具体的内容において, 市民の生活像に関連して, 街
の視覚的表現を巧みに行なっている点である。すなわち, 各地区の市街地の将来形
態について, 過去の伝統を活かしつつ, 一つの街という空間における市民生活, また
街に対する市民感覚を十分に観察し, 生活のある空間としてデザインをしていること
である。街のデザインは往々にしてプランナー等の一方的な紙の上の作業による提

示になりやすいが、この報告書の内容には、その背後に市民のコンセンサスを得ようとする努力と、すぐれた造形感覚とがみられる。

ところで、この報告書がまとめられるに当っては、先述の仙台デベロッパー委員会、また実際の作業を行なった早大吉阪研究室の組織の力によるところがあると考えられるが、市民生活、市民感覚に対応し、それを尊重した都市デザインに関する統一ある思想と具体的なデザインの手法、内容とは、吉阪氏のこれまでに蓄積された生活を主体とした文化史的な都市論、また海外諸都市に関する研究にもとづく都市デザイン論等によるもので、これらが今回の計画に集成されたと考えられ、類書や類似の計画より一段と秀れていると思われる。

この秀れた都市のデザイン能力を活用し、一般になじみ難い都市の総合計画を、市民にとって身近かな形に表現した業績は、都市計画に関する独創的、啓蒙的なものと認め、日本都市計画学会石川賞を授与するものである。

◆論文賞「空間価値論」

早川 和男(建設省建築研究所建設経済研究室長)

〈選考理由〉

本論文は、同氏の学位論文「都市開発における空間価値の研究」をもとに、一般書として敷衍した形で書き直すとともに、豊富な既存資料を用い、都市開発にともなう生ずる地価形成、地価構造の諸側面を解説したもので、3編から構成されている。とくに論文から発展させた点は第1編において地代、地価の形成メカニズムを都市空間の形成過程との関連で説明し、第2編において土地の特殊性から生ずる地価形成と空間形成との矛盾点、例えば投機性の発生、分譲宅地価格の非合理性等を考察し、地価問題の解明に参考となるデータを提供している。

さて、地価は土地利用計画において重要な条件となるものであるが、従来地価に関する研究の多くは社会科学の分野であって、また純理論的研究が中心であった。しかし今日では、データも豊富にあり、地価問題が顕在化している時、境界領域の学問として実証的研究が必要である。都市計画においては古くから土地区画整理における換地計画、また今後は再開発計画、容積計画等において、ますます地価は計画要

素, もしくは計画条件として大きなウェイトをもち, 空間価値の合理性が必要となる。すなわち地価を空間価値としてとらえ, 土地利用計画を都市の空間価値の合理的な増進の計画とみることにより, 両者の間を結びつける一つの方法論を確立することは, 政策科学としての都市計画の理論確立に, また実践論の展開に重要なことである。この著書はこの課題に一步接近し, 新しい研究分野を都市計画学において発展させた価値あるものといえよう。

もちろん, この種の研究は先述のように境界領域の学問であり, 広範囲な知識と特有の理論展開を必要とし, 多くの課題が残されている。事実, この著書も, 新しい未開拓の分野のため, 例えば地域別の空間利用価値の概念規定の甘さ, 指摘された矛盾や問題点の解決の具体的方策の欠如, 土地利用計画への適用方法の不明確さ等, 不十分な点や未解決な点がみられるが, これは今後の発展に期待したい。このような問題はあるにしても, 空間利用価値の概念を都市計画の分野に積極的に導入しようとした研究内容は, 都市計画の研究の新分野を開拓したものとして, 有意義な研究と認められ, 日本都市計画学会論文賞を授与するものである。